

<牛座頭>考 : 付 野上文庫蔵「鷺流狂言秘伝書」解題

橋本, 朝生

(出版者 / Publisher)

法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

能楽研究 / 能楽研究

(巻 / Volume)

29

(開始ページ / Start Page)

29

(終了ページ / End Page)

52

(発行年 / Year)

2005-05-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00002855>

有」と言テよび出し、右之通言テ、「身共がびわがそんな程誰殿へいてかりてこい」と言付。「心得た」ト言。
 「いづれも遠方じや所デ馬ヲお引ト言程に馬もかつてこい」と言。「独りシテハ成まい」と言。「ぜひいけ」言。
 夫より行テ、右之通言、かる。「馬をやれト言付候ハ、遣してない」と言。其通言。「いかい事の馬デござる程に
 せんぎして被下」と言。又言。「ない」と言。是ハ言付て斗也。「いや座頭じや所デ牛デも大事有まい」と言テ、
 牛ヲ楽やへ入、引テ出、「馬じや」と言てかす。きく一かり、帰る。道すがら「乗テ行」と言テのり、「いつの春
 か」などの小歌ぶしで帰る。けんぎやう向ひ出テ見付テ、しかりく乗テ、「此馬ハいかふせがひろいな」と言
 テ行トキ、平家所望する。きんぎやう語る内ニ、仲人出テ、「となりの在所へ行」ト言テ、ミテ、「座頭が牛に乗
 テ行」ト言テわるふを聞テ、けんぎやう角ヲいらいミテ、「見ぐるしい」と言テ、きのどくがり、「何とぞ角のミ
 へぬやう二」と言。きく一かへのづきん持出テさせる。「若シ先デふしんうつならば、馬が此中風引ましてづき
 んきせたと言へ」と言。仲人「どれへぞ行そふなが殊外せく、少いそがせてめいわくさせふ」と言テ、「申く、
 いづれも寄らせて御ざる、はやう御出被成ませとつかひに参りました」と言テはいる。夫よりせいテ牛よりおつ
 るト、きく一牛ニ乗てはいる。「やいく、身共の見すて、どちへ行。やるまいぞく」。

この狂言が注目されるのは、同じく盲人が牛に乗せられる場面を持つ天正狂言本(駄賃座頭)との関係如何にあるの
 だが、前稿では別曲と言うべきものかと判断した。ただし他に台本を見ることができれば、もっと明確になるだろう
 としたのだが、これについて新たな手がかり二点を得たので改めて考えてみたい。

一 野上文庫蔵「鶯流狂言秘伝書」の〈牛座頭〉

能楽研究所野上文庫に「散楽私記」と外題のある本がある。原表紙らしい扉に「鶯流狂言秘伝書」とあり、その方が書名として適当であろう。この本は本誌一五号(平成2・12)の「楽報」に野上家より寄贈を受けた書目を掲げた折に書名が載せられたことがあるだけなので、詳しく紹介しておきたい。

まず書誌的なことから。写本一冊。袋綴の横本(135×201)。薄青色表紙。表紙左に打付書で「散楽私記十八」とある。一丁表の中央に「鶯流／狂言秘伝書」、左下に「昌則」とある。料紙は楮紙。紙数五〇丁。片面一六〜二四行。二丁表に所収曲の目録があり、その末に「右拾有七種 永昌則／所持」とある。奥書などはなく、本文は一筆だが、筆者は不明。一丁表の余白に「讚」「口／日／田」、二丁裏に「全禄公債利金／委任」「帯」、本文中に本文の上に大きく「頼」、余白に「すづめ／すゞめ」とあるのなどは落書らしく、保存状態はあまりよくない。一丁表と最終の五〇丁裏に汚れがあつて原表紙らしく、永昌則が原蔵者であろうが、未詳。筆者である可能性もある。それに表紙を付けて外題を記したのだろうか、「十八」以外の冊はなく、誰がどういうものを集めて「散楽私記」としたのかは不明。なお念のため付け加えるが外題の文字は旧蔵者野上豊一郎氏の筆跡ではない。

所収曲を標題で示し、目録で表記が相違するものを()内に注記しておく。

若和布 鎌腹 川上座頭 釣針 業平餅 人馬謡 内沙汰 牛座頭 猿座頭 髭櫓 枕物狂ひ(枕物狂) 比丘貞
鳴尼(啼尼) 水汲新発意(水汲) 靱猿 よろ法師(弱法師) 景清の内居ぐせ舞(居曲舞)

で、〈人馬〉はキリの謡のみ、〈弱法師〉と〈景清居曲舞〉は能の一節を小舞謡としたもので、二曲とも標題の肩に「習」とある。他の一四曲は狂言台本である。これらの内容については後に検討したい。所収曲目録は二段に書かれており、

上段に順に一〇曲を記し朱で合点を打つ。ただし〈鎌腹〉を〈髭櫓〉の次に記し、「若和布ノ次ニ有ル」と朱で注記する。下段の七曲と「右拾有七種 永昌則ノ所持」は上段と墨色が相違する。本文には小舞謡を含め、謡にはゴマ点を付すことが多く、朱によるものもある。〈鳴尼〉の語りに朱で読点を施す。また造り物図を付す。役名は、○●△などの記号で示すものが多いが、〈枕物狂ひ〉以降の五曲は、シテ・アド・女・太郎などと記す。各曲ごとに丁を改めることが多いが、続けて記すこともある。装束付を朱で付すものもある。片面行数は一定しないが、〈若和布〉から〈髭櫓〉までは二一〜二四行、〈枕物狂ひ〉から〈鳴尼〉までは一六〜二〇行、〈水汲新発意〉〈鞍猿〉は二一〜二三行。目録上段の一〇曲と下段の五曲とで記載態度にやや相違が認められるのだが、筆跡は変らない。

さてこの本に〈牛座頭〉が収められていたのである。まず本文を原本通りに翻刻しておこう(場面で段落を設ける。句読点・濁点を加えるが、原本に濁点のあるものは傍線を付す。補入は「」でくくる)。

牛座頭

○常ノ通、汝を呼出ハ別の事でない。頓而京にいつもの涼の会が有るによつて、けふからのぼらうとおもふが何と有ふぞ。●一段とよう御ざりませふ。○汝が知る通某ハ足ヲけがをしたニよつてありく事がならぬ。そちハあの誰殿へいて大事の馬でハ御ざれ共かさせられいといふてかりて来い。●畏て御ざる。乍去今日登らせられうと思召バ二三日も前から被仰て社よう御ざらうずれ、是ハ俄なからせられ

なを
 〇此と出ハ別の事でない。頓而京にいつもの涼の会が有るによつて、けふからのぼらうとおもふが何と有ふぞ。●一段とよう御ざりませふ。○汝が知る通某ハ足ヲけがをしたニよつてありく事がならぬ。そちハあの誰殿へいて大事の馬でハ御ざれ共かさせられいといふてかりて来い。●畏て御ざる。乍去今日登らせられうと思召バ二三日も前から被仰て社よう御ざらうずれ、是ハ俄なからせられ

△ソレハ安い事。かさふが、身共が馬ハ地道が早い程にそ
 ちがめいわくしよふぞよ。●サレバ今独言にもこなたの御
 馬ハ地道が早ふ御座る二依て私が迷惑で御ざるとの申事で
 御ざりました。△左あらバそちが迷惑せぬ様に、こいだを
 持た程に是二鞍を置いてかさうぞ。●ヤレくそれハ忝う御
 座る。さあらバ其小荷駄をかさせられて被下い。△定而そ
 ちが口をとつてゆかふ二依て、そちが早ウあゆまバ早かる
 うず、おそく行かバおそからふぞ、そう心得い。●中く、
 私口をとるで御ざらう。夫レならバ一人忝う御座る。追
 付かさせられて被下い。△引出サう程に、それにまで。●
 畏て御座る。●楽やより牛ヲ引出ス。△菊都ゐるか。●是
 にゐ外る。△サアく是ヲかすハ。そちへの馳走じやぞ。
 引てゆけ。●忝う御ざる。△京から戻たら勾当に隙ヲ貰ふ
 てゆるりと咄に來い。●帰り次第お見舞申外ふ。扱わたく
 しハこう参り外う。●暇乞常の通。
 のうく嬉しや、かつて参る程に勾当の満足遊バそう。も
 一ツの馬ならバ早からうに依て身共ハ馬にえつくまいし、
 おそくハしかられふず、某志人の迷惑で御ざるを、此様な

入るハ地道が早い御座るから早い程にそちがめいわくしよふぞよ。サレバ今独言にもこなたの御馬ハ地道が早ふ御座る二依て私が迷惑で御ざるとの申事で御ざりました。左あらバそちが迷惑せぬ様に、こいだを

持た程に是二鞍を置いてかさうぞ。ヤレくそれハ忝う御座る。さあらバ其小荷駄をかさせられて被下い。定而そちが口をとつてゆかふ二依て、そちが早ウあゆまバ早かるうず、おそく行かバおそからふぞ、そう心得い。中く、私口をとるで御ざらう。夫レならバ一人忝う御座る。追付かさせられて被下い。引出サう程に、それにまで。畏て御座る。楽やより牛ヲ引出ス。菊都ゐるか。是にゐ外る。サアく是ヲかすハ。そちへの馳走じやぞ。引てゆけ。忝う御ざる。京から戻たら勾当に隙ヲ貰ふてゆるりと咄に來い。帰り次第お見舞申外ふ。扱わたくしハこう参り外う。暇乞常の通。のうく嬉しや、かつて参る程に勾当の満足遊バそう。も一ツの馬ならバ早からうに依て身共ハ馬にえつくまいし、おそくハしかられふず、某志人の迷惑で御ざるを、此様な

と思ふてかりて参りました。○まだ其つれヲぬかしおる、牛がじやうじやな。●疑もない牛で御ざる、角が二ツ迄きつとして御ざる。○扱もくだまいて牛をかりたと思へバいよく腹が立。乍去是から追放いてもやらう様も有まいもそつとの事じや。是非二及ぬ、乗てゆかふ迄。●随分苦うない事で御ざる。めして御ざりませ。○何れくびが長し、遅ひと思ふたれバ何がどうり社、牛じやものヲ。

□申く、人が聞かぬかと思て言事を聞かせられい、扱は牛じやと知らいでのつたがじやうそうに見へて御ざる。×近比可笑い事で御ざるぞ。□ヤレく見ぐるしいなりかなイザさらバ何も感じや。座頭が牛にのつた見さいなど云てはやしますまいか。×一段と能う御ざらう。×座頭が牛にのつたをみさいな、く、く。○身イヤ、をのれら八身どもが牛に乗ふが馬に乗ふとかまいぞ。□サレバ社腹を立ると見へた。サアくはやさせられい。×又はヤス。○扱もくにくいやつ。何としてよからうぞ。はらの立事かな。□殊の外腹ヲ立る。たはやせ、く。○菊一く。●ヤアく。○その傘の糸であいつらを思ふ

そつれヲぬかしおる。●疑もない牛で御ざる。角が二ツ迄きつとして御ざる。○扱もくだまいて牛をかりたと思へバいよく腹が立。○是非二及ぬ、乗てゆかふ迄。●随分苦うない事で御ざる。めして御ざりませ。○何れくびが長し、遅ひと思ふたれバ何がどうり社、牛じやものヲ。

□サレバ社腹を立ると見へた。サアくはやさせられい。×又はヤス。○扱もくにくいやつ。何としてよからうぞ。はらの立事かな。□殊の外腹ヲ立る。たはやせ、く。○菊一く。●ヤアく。○その傘の糸であいつらを思ふ

さまた、け。●まかせて置せられい。ト傘ノエニテタ、キ廻ル。○モウ何モやますものハないか。●其こしにさ、せられた杖で打せられい。○ヤ、誠にをのれらハ目が見へぬと思ふてなぶるか、どこにをるぞ、やるまいぞ。ト目クラ打ニ方々扣キ廻ル。x□ハヤシく、笑ひ這入ル。●をのれらハやる事でハないぞ。やるまいぞ。牛モ其マ、入ル。

○●タ、キ廻ル内、□悪人ソツト行、勾当ヘシツペイラ当ル。

○アイタく、何者ヤラ身共ニシツペイラ当テラツタ。●

サテくニクイ事デゴザル。アイタく。申く、某ヲ何

モノカタ、キヲリマシタ。x[兩人シテ○ヲナケ]テ笑ナガラ入

ル。庄三郎口伝。

○シテ勾当 角帽子 長袴ノ下モ 衣 扇 杖 ねり白ノ袴

●菊都 狂言袴ク、リ 水衣 腰帶 杖 傘後ニモツ

△貸人 長上下

x]通り人三人同断

牛 黒頭 角式ツ付 黒キ毛革 面ケントク 手綱付ケル

ほうやくいしをりれい...
 ア...
 杖...
 と...
 ト目クラ打ニ方々扣キ廻ル...
 らい...
 ○タ、キ廻ル内...
 ○アイタく...
 ●サテく...
 ハタ、キツリ...
 ヘル...

○シテ勾当 角帽子 長袴ノ下モ 衣 扇 杖 ねり白ノ袴
 ●菊都 狂言袴ク、リ 水衣 腰帶 杖 傘後ニモツ
 △貸人 長上下

x]通り人三人同断
 牛 黒頭 角式ツ付 黒キ毛革 面ケントク 手綱付ケル

曲末の装束付は朱で記されている。

この本(以下「秘伝書」とする)の素性がわからないままでは本文の価値は定めにくいだが、セリフをきちんと記した台本であり、「狂言大外」では記述が簡略すぎてわからなかった部分もよくわかることになる。後記にある「庄三郎口伝」については後に回して、もう一つの手がかりを示そう。

二 宝曆名女川本・遠雑類の〈牛座頭〉

能楽研究所に笹野堅氏旧蔵本がある。これについては岩崎雅彦氏「笹野堅氏旧蔵文献資料目録(付解題)」(本誌二三号。平成11・3)が備わるが、これによつて笹野氏が「古本能狂言集」の続編の刊行を企図されていたことがわかる。残された「構成一覽表」(前掲目録の二13)によれば、既刊の『古本能狂言集』五卷(昭和18〜19)に「序説」「索引」「別巻 能狂言の研究」の三卷を加えようとされていたのであり、その「序説」の巻は「第一章 能狂言伝書の標準」「第二章 能狂言諸本解説」「第三章 能狂言伝書の特質」「第四章 大藏虎明伝書の価値」からなるが、中心となるのは第二章で、「古本能狂言・間につきての研究―和泉流本―」(『日本演劇史論叢』昭和12・5)以来紹介してこられた膨大な諸本のうち九七本について、狂言・風流・間・芸道・古刊本に分け、流派ごとに時代順に並べて体系化を図ろうとされていたらしく、そのための草稿(二9〜12他)もあり、既刊の抜刷類(七A3)にも大量の書込みがある。そして「能狂言諸本輯影」を付してこれら諸本の写真(二五七図)を収める予定で、これは印刷見本(二5)までである。

さて宝曆名女川本については「名女川六右衛門本」「名女川六右衛門間之本」として、現在所在不明の七冊(本狂言は「盗類雑」「遠雑類」「本書綴外物」の三冊)について「古本能狂言・間につきての研究―鶯流本―(三)(四)」「書誌学」昭和12・10、11に解説があり、「能狂言諸本解説」にそのまま収録される予定だったと考えられるが、それに

「鶯流『宝曆名女川本』について(上)(下)(補遺)」「二観世」昭和51・10、11。『能研究と評論』12。昭和59・5。補訂を加えて「狂言変遷考」平成14に収録)で五代辰三郎であり、成立は宝暦頃と訂正されている。

さて「秘伝書」と比べるまでもなく、ほぼ同文であることは一目瞭然である。「秘伝書」は勾当の名ノリを省略していたが、足の怪我を言ったかどうかとは後のセリフによってわかる。ただしその相違がある他、文字遣いも違っており、直接の書写関係は想定できない。となると、「秘伝書」は宝暦名女川本と極めて近い圏内で伝承された本ということになる。となると、「庄三郎口伝」の庄三郎とは名女川庄三郎に違いないということになる。鶯流伝右衛門派の有力な弟子家であった名女川家歴代については永井氏前掲論文に詳しく、名女川庄三郎は文政三年(一八二〇)に生れ、明治三六年に没した名女川家最後の狂言役者であり、吾妻能狂言にも参加した九代のことである。²⁾ただし寛延三年(一七五〇)の観世元章江戸筋違橋勧進能の出演者にこの名が見える。³⁾また演能記録調査研究グループ(代表表章氏)編『近世能役者研究の基礎資料』(平成12・4)によれば、天明元年(一七八二)江戸城祝賀能、文化一〇年(一八一三)江戸城祝賀能の出演者にもこの名がある。天明・文化の分は同一人の可能性があるが、それは寛延の分とは別人であろう。庄三郎は少なくとも三人はいたらしく、名女川家の子弟によくつけられた名のりなのである。

「秘伝書」そのものが宝暦名女川本に近いものなのか、また庄三郎を特定することができないか、この本の他の所収曲を見ておくこととしよう。

三 「秘伝書」所収曲

まず「秘伝書」が伝右衛門派の台本であることは確かなことのようにである。宝暦名女川本には伝右衛門派の両様を記す狂言が数曲あるのだが、幸い(鎌腹)(業平餅)に両様がある。それらを見るに、二曲ともこの本はそ

43 〈牛座頭〉考

宝曆名女川本の本狂言台本には現存五冊、笹野氏紹介の三冊の他にも散逸した冊があることが永井氏によって推定されており、〈枕物狂ひ〉(鳴尼)は「唐老雜」(唐人・老人物と雜狂言)、〈鞆猿〉は「禪大部」(禪狂言・大名狂言)にあつたものらしい。

さてまず注意されるのは(若和布)である。これは享保保教本に「京流ノ狂言ナリ」とされる和泉流固有曲で、鸞流ではこの本の他は、享保保教本・宝曆名女川本と関西大学図書館蔵『栗本実鑑集』にしかなく、書上の類にも常磐松文庫本の書上などに「書上之外」として見えるだけで、仁右衛門派の台本・書上にも全くなく、鸞流非所演曲なのである。この本文が享保保教本や『栗本実鑑集』とは違い、宝曆名女川本とほぼ同文である。ト書の部分までは同文で、書写関係があるかのようにも見えるが、宝曆名女川本で「進上」とあるのを「進せう」とするなど、文字遣いの相違はあり、相違のあり方は(牛座頭)と同様なのである。

猿座頭		鬼山座	○	二本とも曲名は〈花見座頭〉
髭櫓		出女類	○	
枕物狂ひ	百姓・祖父類			
比丘貞	僧之類	出女類	○	
鳴尼	僧之類		○	
水波新発意	僧之類		○	
鞆猿	大名		○	

〈鎌腹〉は宝暦名女川本に前述のように伝右衛門派・仁右衛門派の二種が記載されており、筋立てでは変らないのだが、妻が夫を非難するのに伝右衛門派では「三界を家として」と言うのが仁右衛門派にはないなど詞章に微妙な違いがある。そしてこの本も詞章はかなり違うのだがこれは同様に言うのである。ただし、この本は筋立てを説明するだけの部分が多く、結末については、夫が山へ行こうという演出と、妻が出て「ワビ事ヲシテ男ヲ女ガ負フテモ入ル」演出の両様を記し、後の方の妻の出方にも、夫が山へ行くかどうか確かめようとしてというのと自害するのを聞きつけてというのとの両様を記す。宝暦名女川本では二種とも、妻が自害を聞きつけて出るのであり、また男を背負うことはない。そしてこの本は四丁表から書き出すのだが、三丁裏の〈若和布〉の余白にも同筆で「鎌腹」として「山へ行時二道行謠有り」とあって、

をこと鎌とをかたニかけいざしばかりニいせうよく

の謠を記す。これも宝暦名女川本の伝右衛門派の分にはあり、この後鎌で腹を切ろうとする。夫が山へ行こうと言って終るのは和泉流と同じなのだが、和泉流では謠は自害を止めた後にある。それを道行の謠とする演出を後に書き加えたものであろう。この本で様々の演出を記すのは伝右衛門派の工夫の跡であり、和泉流演出を取り入れて仁右衛門派とは違う演出を採ろうとしたかに見える。宝暦名女川本より古いものである可能性を示唆する。

〈釣針〉もその意味で注意される。これは標題の下に、「釣女トモ云也」と「狂言記」の曲名を注記するのだが、本文も宝暦名女川本・常磐松文庫本とは違って、『狂言記』本文に近く、太郎冠者が夷を「きびす三郎殿」と言い、主人にとがめられて「木でつくつた折ハきびす三郎殿」と言ったり、向こうの山の名を聞かれて冠者が「あハじのしま山こぎくる舟ハ面白やで御ざる」と答えるなど、『狂言記』に特徴的な詞章がそのまま採られ、ほぼ同文なのである。そして最後まで記した後、後半の downward からの別演出が書かれていて、釣針を見つけて太刀・刀を釣った後女たちを釣

るとする。後記に「本ハ他流ノ此後書ハ当流也」とあるのだが、その通り別演出は宝曆名女川本や常磐松文庫本に近い。鶯流で（釣針）を演ずるのに、まず「狂言記」から取り込み、それに工夫を加えていった痕跡を残しているのではないだろうか。

（猿座頭）は備考に示したように、鶯流では仁右衛門派をも含めて（花見座頭）の曲名で演じられるものである。表に注記した通り常磐松文庫本には二種あり、前のを甲、後のを乙とすると、甲では「西山東やまの花盛り」と言うものが乙にはない、などの小異がある。そして乙の後に「又」として一人残された勾当が猿にひっかかれるところの別演出を記す。宝曆名女川本は乙と同じく「千寿」へ行くとし、詞章もそれに近いが、この本は甲に近い。そして注目されるのはこの本が大蔵虎明本（猿座頭）に近いことである。この本は後半、猿引に言い寄られた妻が心を動かすところから、セリフを記さず、ト書きのようになるのだが、これも虎明本に同じなのである。本文が完全に一致するのでなく虎明本を書写したというようなことではないのだが、これだけの近似を見せるのをどう考えればいいのか。大蔵流から（猿座頭）を取り入れ、工夫を加えていつて鶯流の（花見座頭）とした、その痕跡を残すと見ていいのではないだろうか。

特に注意されるのは以上の諸曲で、他は享保保教本ともあまり変らないが、本文は（若和布）や（牛座頭）冒頭のようにには一致しないもののほぼ宝曆名女川本に近く、常磐松文庫本にも近い。（業平餅）は前述のように宝曆名女川本には二種あり、明記されてはいないものの前者が伝右衛門派のもの、後者が仁右衛門派のものと考えられるが、前者の方に近く、常磐松文庫本ともあまり変らない。（人馬）は「いで馬になさんとて……」の謡だけで、どの本とも小異があるが、常磐松文庫本の「狂言謡」にあるものと完全に一致する。

注目されるのは〔髭櫓〕の夫の名のりで、宝暦名女川本では「近日大内へ放生会を取フイキヤウおこなわせらるゝ」とあるのを、この本では「内裏に放生会を取行ハせらるゝ」とある「内裏」「生」を墨滅して「此度大内ニおいて放生会を取行ハせらるゝ」と改めるが、常磐松文庫本では「此度大内におめて放生会を取行わせらるゝ」と、この改訂を引き継いでいる。⁽⁵⁾

なお小舞謡〔弱法師〕〔景清居曲舞〕は、能楽研究所に蔵される常磐松文庫本と同筆の『鷺流小舞集』にもあり、詞章がほぼ一致する。〔弱法師〕は「月落かゝる」からだだが、その後「雪の白山」と続け、「能でハ淡路嶋山」と注記する。ここも『鷺流小舞集』と同じなのである。ただしこの本には前述のようにゴマ点が付され、さらに所作付も付されている。なお所作付は〔比丘貞〕の謡の部分などにも付されており、この本が上演はともかく稽古などに実際使用されたものであることを示している。

こう見てくると、この本は詞章からは宝暦名女川本より古い部分もあるものの、宝暦名女川本と常磐松文庫本との間に位置するということにならう。そこで常磐松文庫本の成立時期が問題となるが、竹本氏前掲論文によれば、包み紙の裏打ちの反故に嘉永四年（一八五二）、安政四年（一八五七）、五年の記事が見えるとのことであり、『鷺流小舞集』にも嘉永五年一〇月二三日の記事が見える。その頃以降に成立したもののらしい。

では庄三郎とは誰なのか。宝暦名女川本に近いとなれば、寛延の元章勸進能に出演した庄三郎かと考えたくなる。ところだが、「口伝」を伝える役者としては名家の当主と見るべきであり、嘉永・安政頃にはまだ三十代と若いものの九代庄三郎とすべきであろう。想像をたくましくすることになるが、当主であれば宝暦名女川本が手許にあったはずで、それを「口伝」することもありえただろう。なお常磐松文庫本にいまはない半紙が元は添付されており、笹野氏の解説によれば嘉永三年、吉見儀助によるものである（そこに「野中儀衛門」の名があつて笹野氏はこれを「野中氏本」とされたのである）。この吉見儀助については永井氏前掲論文に詳しいが、九代庄三郎の師であつた。常磐松文庫本と

も近い関係にあることになる。

結局筆者についての結論は得られないものの、この本が取合せ本などではなく、全体として伝右衛門派の台本であること、また〈若和布〉〈牛座頭〉のような非所演曲、〈枕物狂ひ〉のような重い曲、習の小舞謡などを収める、「秘伝書」の名にふさわしい本であること、したがってこれまで知られた三本と並んで貴重な本であることだけは確認しておこう。

四 〈牛座頭〉と〈駄賃座頭〉

さて甚だしく迂回してしまつたが、この本の〈牛座頭〉は宝暦名女川本に極めて近い台本としていいようであり、これによつて『狂言大外』よりも由緒正しい本文が得られたと言えよう。

改めて筋立てを追つておこう。

勾当が菊都を呼び、京の涼の会に行くのに誰殿(役者の名を言う)から馬を借りて来いと言ひ付ける。菊都は誰殿の所へ行って案内を乞ひ、馬を貸して欲しいと頼むが、誰殿はいつものは地道(緩歩)が早いので小荷駄(荷馬)を貸してやろうと言つて牛を貸す。菊都が曳いて戻り、勾当が乗つて行くが、首が長いのを不審がる。そこへ二人の若い衆が来合せ、盲人が牛に乗つたのがおかしいと言ひ、勾当たちも牛だと気づく。若い衆は「座頭が牛にのつたをみさいな」と囃し立て、怒つた勾当が菊都に傘の柄で叩かせ、自らも杖で打とうとするが、当るはずもなく、若い衆が笑いながら入るのを追い込む。

そして終曲部に次のような別演出があるということらしい。

勾当たちが叩きまわるうちに若い衆の一人が勾当にしつぺいを当て、別の一人が菊都を打つた末、二人で勾当を

投げて笑いながら入る。

問題の「庄三郎口伝」はこの別演出の方を指すのかも知れない。

なお本文中の貸し手のセリフ「此間ハ見へなんだよ」の文末詞「よ」、菊一のセリフ「デモ小荷駄じやと被仰て御ざる」の接続詞「デモ」の使用など、江戸後期らしい語法があることも注意されるが（このこと、永井猛氏のご教示による）、これらの語法が鶯流台本でいつ頃から現れるのかは確認しえていない。

さて『狂言大外』でこの本と相違する主な点は次の通りである。

・シテは検校で、山一つあなたへ琵琶の会に行くと言う。

・貸し手が馬を貸してやれと言いつけるなど下人とのやりとりがある（鏡の間の方に下人がいるものとして一人で演ずるのだろう）。

・菊一は借りた馬に乗り、小歌を謡いながら帰る。

・検校は牛に乗った際に「いかふせがひろいな」と不審がる。

・検校は平家を語りながら行く。

・来合せるのは「仲人」一人である。

・仲人に笑われて検校は角を探つて牛と知り、菊一に角に頭巾をかぶせさせ、馬が風邪を引いたので頭巾を着せたと言えと言う。

・仲人は検校たちを急がせ、検校はあせつて牛から落ちる。

・菊一は牛に乗って入り、検校が追い込む。

こうした相違はあるものの同一曲の別演出としてさしつかえあるまい。いちおうこれを大藏流の（牛座頭）と見てい

いのだろう。

冒頭に述べたように、この類曲が天正本にある〈駄賃座頭〉である。これも全文を能楽研究所蔵の原本によって引いておこう(句読点・濁点を付す。セリフに「」を補う)。

だちんざとう

一ざとう二人出て道にくたびれる。「だちんとる」とてよばゝる。一人出て、うしにのせる。道に人あまた、こゝなるざとうが 馬にはのらで うしにのつたおかしや くゝとはやされて、さぐつて見る。つのをさぐりてはら立て、こぎふに「目出たき御代のはじめには駒にもつのおひそろよ」とをしゑる。こぎふゆひそぎす。後「ざとうにもつのおひ候よ」。ばうづはら立て、はり合。そばよりつらはる。さてくみ合て、ざとうのばうをふみて帰る、とめ。

「こぎふ」は小盲で、菊都(菊二)に当る。「だちん」は駄賃馬で、馬を雇おうというのである。「ゆひそぎす」は堀口康生氏が「天正狂言本」をめぐって「音韻表記の立場から」(『芸能史研究』52。昭和51・1)で指摘されたように「言い間違える」の意で、「駒にもつのが」と教えられた小盲が「ざとうにもつのが」と言い換え、「ばうづ」即ち座頭が腹を立てるのである。

「狂言大外」の〈牛座頭〉とこの〈駄賃座頭〉とを比較して前稿では別曲と見るべきだとした。その根拠としたのが〈牛座頭〉に唯す文句がないことであった。ところが、「秘伝書」では同様に唯すことがあったのである。その唯すのが「人あまた」であったのも、「若い衆」となっていて一致するのであり、その若い衆が「そばよりつらはる」のも

別演出にはある。「ざとうのぼうをふみて帰る」のは小盲と見たいが、「人あまた」と取ることもでき、それなら別演出と一致する。

こう見てくると、〈駄賃座頭〉と〈牛座頭〉は同一曲としていいのではないだろうか。肝心の囃す文句は違っていて、「秘伝書」の方は〈金津（金津地藏）〉などの文句に似るのであり、設定も相違するものの、少なくとも原形的類曲とはしていいだろう。笹野堅氏は「能狂言の成型」（『国語と国文学』昭和15・11）で初めて天正本を紹介された際に両曲に関係ありとされていたのだが、宝曆名女川本によってこれを見ておられたのだから肯けるのである。

そして逆に〈牛座頭〉から天正本を照らせば、囃すことが残っていくことから見て〈駄賃座頭〉の中心的趣向は道通りの者たちが牛に乗った盲人を囃すところにあつたのだということになろう。

前稿でも触れたが、『証如上人日記』の天文五年（一五三六）正月二日条に石山本願寺の「坊主能」で上演されたという「座頭牛に為乗所」はその中間にあることになろう。何らかの伝承があつたのであろう。

なお〈牛座頭〉の上演記録が鳥取池田藩の記録に見えることは小林資氏「鳥取池田藩芸能記録の発掘」に現われた狂言（『能楽思潮』21。昭和37・6。「狂言史研究」昭和49に収録に既に触れられているが、宝永年間に五回の上演が見られる。その後田中貢・永井猛氏「鳥取池田藩演能記録」（『芸能史研究』131、133、135。平成7・10、8・4、10）によって正徳年間の記録が紹介され、さらに四回の上演が確認できる。九回のうち四回演じている田中平九郎は藩抱えの御手役者であり、江戸の藩邸でも上演している。その他、江戸伊達藩邸での演能を記録した宮城県図書館伊達文庫蔵「能組留」によれば、正徳二年（一七二二）五月二六日に「奥対面所舞台」で、大蔵八右衛門（三代時虎が〈牛座頭〉を上演した記録がある。鳥取池田藩の御手役者たちとの関係を考えていいのかも知れない。彼らが演じたのはいちおう「狂言大外」の形とすべきであろうが、もっと「秘伝書」に近い形で、囃し立てることなどはあつたと想定したい

ところである。

鶯流での上演記録は鴻山文庫蔵「名女川庄三郎所持諸番組」中の「辰」年(年不明、江戸末期であろう)八月一八日の「清水様御囃子組」(シテ佐吉など)にあり、常磐松文庫本の書上などには「書上之外」にあげられる。江戸末期までこの狂言は命脈を保ったらしいのである。

注

(1) この本については、その後稲田秀雄氏が「狂言番外曲の伝承経路(上)(下)——天理堀村本所収曲をめぐって——」(芸能史研究)140、142。平成10・1、7)で精細に検討されている。「大外」の奥書にある堀村家の所在地「東路」を「車路」と読むべきだとされたのにしたが、訂正しておきたい。

(2) 「狂言辞典事項編」に子息たちは吾妻能狂言衰退(別に明治十年代とある)後家芸を廃したとあるので「最後の」とするが、大正三年四月三日に鶯畔翁が催した「亡母五十回忌追善」の会(観世舞台)に子息市太郎が出演する(能楽研究所水野文庫蔵「番組」など、細々ながらも活動していたらしい)。

(3) 観世文庫蔵「神田筋違橋勸進能番組」による。間や伝右衛門(四代敬之)シテの狂言のアドを勤めている。名女川姓では他に五代辰三郎がいる。

(4) 竹本氏はこの論文では野中の名を儀右衛門かとされたが、その後「岡田紫男の「猿楽聞書」」(「能楽タイムズ」57。平成11・6)で、やはり儀左衛門が正しいらしいとされた。なお同稿で常磐松文庫本が笹野氏のいう「野中氏本」かどうか不明とされたが、「野中氏本」の写真が前掲「能狂言諸本輯影」に一図(他に間狂言本一図)あり、同一の本であることが確認できる。

(5) 仁右衛門派の寛政有江本では「禁中に於て大嘗会」とあり、もちろんそれが正しい。聞き違えて漢字を宛てたための誤りだろうが、「放会」をどう理解していたのかはわからない。

(6) ただし訂正の類がすべてそうなのではなく、〈髭櫓〉のキリの謡で「大きな毛抜にはさまれてく根なからくつすとぬげにける」の「に」「すと」を「で」「とぞ」と訂するが、これは宝曆名女川本・常磐松文庫本とも訂正本文の通りになっている。

(付記) 天理大学附属天理図書館に資料翻刻のご許可を得た。また永井猛氏に草稿段階でのご助言を得た。感謝申し上げます。